

こんにちは。文化財課の児玉です。雪が降っては止み、積もっては溶け、を繰り返している12月ですが、雪が積もると目にするのは、近くの空き地まで雪を橇そりで運ぶご高齢のかたやスーパーマーケットで買ったものを橇に乗せて帰るご婦人、子供を橇に乗せて遊ぶパパさん、ママさんたち。橇で運ぶ姿は雪国ならではの光景ですね。

橇は、泥土の上で使う「土橇つちぞり」、氷雪上で使う「雪橇ゆきぞり」、横に並べた丸太の上を滑らせる「木馬きんま」があります。

もちろん雪国で多く用いられる橇のほとんどは「雪橇」で、本市の朝日山（2）遺跡の井戸跡からは平安時代から中世のものと考えられる雪橇が出土しています。雪橇には原初的な橇形式である「一枚橇」、1本の台木にV字形の腕木が付く「一本橇」、安定と同時に雪の摩擦を少なくした「二本橇」の3種類があります。これらのうち、一般的に使用されているのが二本橇で、「四ツ山橇」などと呼ばれています。

雪国での生活の実態を初めて全国に伝えたのは、天明年間（1830-1844）に越後地方の生活や風俗などを克明に記録した鈴木牧之の『北越雪譜ほくし ほくえつせふ』が有名です。『北越雪譜』では、橇を「舳」と書き、特に大きなものを「修羅」と呼んで長い材木や巨石を運搬するのに用いています。

雪橇に関する絵図は江戸時代後期に多く見られ、青森県の例としては『奥民図彙おうみんずい』が代表的です。弘前藩江戸定府の侍、比良野貞彦ひらのさだひこが津軽の民衆生活を記録に綴ったもので、天明8年から寛政元年（1788-1789）に記録されたと考えられています。乗用の「箱雪船はこそり」と四ツ山橇に酷似した「嶺雪舟たけそり」、ほかに橇で荷を運搬する様子を描いた図と解説が紹介されています。

ほかにも宝暦8年（1758）前後のものと推定されている『津軽見聞記』（筆者不明）には、荷物を運びあるいは人を乗せる「雪船」、元治元年（1864）に完成した画帳『東奥津軽山理海観とうおうつがるさんり かいかん図』（作者：清白閑人せいはいくかんじん）には、鋸で切った雪の塊や子どもを橇に乗せて運ぶ様子が描かれており、乗用のものを「箱雪舟」、荷を運ぶ橇を「雪舟」と称して紹介しています。幕末から明治初めにかけて平尾魯仙ひらおるせんによって描かれた『津軽風俗画卷つがるふうぞくがかん』には、大動員による巨石の橇曳きや、侍が箱橇に乗る姿、雪橇の上に米俵と子供を乗せる場面や、数人の子供達が橇で遊ぶ様子が描かれています。特に巨石の橇曳きでは、引き手が二手に約30人ずつに分かれ、巨石に乗る人が2人、後押しの人が7～8人ほどで、計約70人が運搬作業する様子は迫力があります。

今年も残すところあとわずかとなりました。メルマガを読んでもくださっている皆さまには、今年も一年お付き合いいただき感謝しております。来年もよろしく願いいたします。良いお年をお迎えください。